

源氏物語行幸の巻論

— 内大臣家の人々造型 —

目加田 さくを

常識的な、と申そうか、当時の通念的な理想の女性、少し古物語のヒロインめいてさへいる藤壺を薄雲の巻で他界させたあと、作者は今迄、満を持していたところの、新しいタイプの理想の女性、知性溢れるヴィーナス玉鬘を登場させる。帚木、夕顔でテラリ言及したが、それ以後、源氏世界の表面に浮かびあがらなかつた夕顔の遺児が、玉鬘の巻以後、真正面から堂々と登場してくる。老練さを増した作者の配慮が隔々まで緻密に行きわたっていて、うっかりすると安易に読過する場合が甚だ多いのである。(源氏本文は岩波文庫本)

玉鬘の巻で21歳の十月、六条院は丑寅の町、西対の住人となつて以来、初音・胡蝶・螢・常夏・篝火・野分・行幸と物語の主流を占め、つまり、主人公源氏の心を日夜占めつづける姫君となつてしまふ。遂に藤袴巻末で、「女の御心ばへはこの君をなむ本ほんにすべきと大臣達定め聞え給ひけりとや」という迄に成長を遂げる。理想の女性となつたのである。容姿の華麗すかさ——(螢の巻で兵部卿宮、源氏を悩殺した)——に加えて、素直で柔軟な心情、人の好意を酌みとる心豊かさ、不倫を忌避する潔癖と巧みにかわす骨つばさ、何よりも源氏世界の女性中随一の註(1)教知の持主である。源氏物語世界には、

さしもの光源氏も、遂に手の届かなかつた貴婦人が用意されている。朝顔齋院・秋好中宮・玉鬘である。藤壺との姦通は后妃かつ継母という重い不倫で、その為死後藤壺は苦患に墮ちた。大罪である。これを軸にもつてきてはじめて源氏の運命が華やかに展開するわけで、いわば必用悪、「おいしい毒」であつた。これには罪の緩和剤として、年齢差——(桐壺帝との不似合さ、源氏の愛人六条御息所より2才年下である。桐壺帝はてれて、「女皇子たちと同じ列に思ひきこえむ」と求婚した、源氏藤壺は年齢的にはふさわしい、間違が起る可能性あり)——、桐壺更衣に酷似する藤壺に、その故に源氏にめをかけるように頼み、始終同伴し、糸口を作つたのは帝である、等々、用意した。つまり姦通の毒素を薄める役をもたせた。ぎりぎりの許容量の毒性で抑えたのである。近親相姦、母娘共に通じる、などということには、生理的に嫌悪を覚えるのが作者紫式部である。現実には、当時宮廷において、そのような乱倫の天皇、帝父子に通じた女房もいたのであるが、源氏物語世界最高の理想的貴婦人玉鬘は、豊麗な姿態と健康な心情、知性、明朗豁達な性格で天下の貴公子を魅了する。したがって色好の六条院もしたたか

その魅力のとりこになつて了う。本気で結婚を考へるしまつであらう。この状態で「野分」は終る。紫式部が創造した理想の女性は、まず第一に無傷であらねばならぬ。が、いかに聡明な姫とはいへ、実父にかまわれず放置されて二十年、他人の六条院に拾ひあげられ、養女として下にもおかぬ待遇をうけている。その養父の魔手から一人でのがれることは不可能であらう。

さて、その方法を作者はどう設定しているか。見所である。

行幸の巻は、美しい玉鬘の装束を機に、実父内大臣との対面、尚侍出仕に向つて事態が動いてゆく。複雑に揺れうごく源氏の心情が基底となつて、玉鬘・内大臣・弟妹といった内大臣家一門の人間像が、実に見事に造形される。作者紫式部の筆の冴えには目を見張るものがある。ここではそれを論じよう。

源氏は、玉鬘に対して、実父にもまさる深く豊かな愛情で、「おぼしいたらぬことなくいかでよからむことはとおぼしあつかひ給」うのであるが、彼の宿命的な色好のさながら、玉鬘への執着はつづけるばかり。聡明でも二十三歳という玉鬘には、それが重荷になつてゐる。源氏は、勘の鋭い紫上に早くも指摘されたことでもあり、養女に手を出すなど、軽率な、と自戒しつつも、己が情念をどうにも出来ぬところまできていた。他方、尚侍として出仕させようとも考へている。しかしそれも、未練がましく、尚侍となつても、ひそかに關係をもつ事は可能だし、というような甘く小ずる下よみをしてゐる。しかし、愛人とした場合、紫上なみには思ふぬことは自明で、それが玉鬘にとつて不憫だな、と、とつおいつ考へる。さらにとて、愛人ならぬ純粹の養女と思ひなす迄には、容易なことではな

い。理性・自制心がゆるむと、つい六条院にかこう愛人の一人としてたくなる。その前提で事態を考へようとする。この時、この前提を全否定する重大な支障として、源氏の執拗な慕情を打ちくたくのが、実父内大臣の性格・人柄である。

(一) 性格・人柄 その(1)

内大臣の、「きはくしうすこしもかたはなるさまのことをおぼししのばすなどものし給ふ御心」

これが娘玉鬘の幸せを守ることとなる。色好源氏の手から救ひ、浮名を流させることなく、後日幸福な結婚、太政大臣北方へと導くこととなる、と、作者紫式部は設定しているのである。

行幸の巻冒頭で、内大臣は(a)正邪、黒白をはつきりつける人柄、一寸した不様さも我慢出来ない性格という。故致仕太政大臣家本来の家風をうけた、潔癖、礼節正しい、気骨ある精神の持主として、まず造形される。それ故に、源氏は、もし自分が玉鬘を愛人としたら、内大臣は粹を利かしたひめごととはせず、正式に結婚式をあげて天下に披露するであらう。そうすれば、養女と結婚した事、わるくすると、かつての愛人夕顔と内大臣との間の遺児を尋ねとり、ものずきにも世話をやいて、とどのつまりは愛人夕顔——(源氏が若き日の御乱行から死にいたらしめた例の秘事も、或はそのうち世にしれるかもしれぬ)——の遺児と結婚する、母娘に通じるといふ見苦しい事情がばれて、馬鹿くしいことになるかもしれぬ、と聡明な源氏は考へをめぐらし、漸く、玉鬘との結婚を、「おぼしかへさふ」、断念する気になる、というのである。つまり、内大臣

が、源氏のような「わけしり」でなかったおかげで玉鬘は難をのがれえたのである。もとより、作者は、玉鬘自身の叡知による柔軟かつ強靱な拒否が源氏の執拗な接近を食い止めた事実とあいまってのこととするのであるが。

そうなるも源氏は大原野行幸の見物に玉鬘を「出だしたて」る、自分に瓜二つの美男冷泉帝を拝見したら、宮仕をためらうている玉鬘の乙女心が動くにちがいないと読んでの計画である。この狙いは的中し、尚侍として出仕する事に玉鬘は心を弾ませる。ただし、彼女は、世間の若い娘のような、ほせ方、へんな期待をもってではない。

「なれ／＼しきすぢなどをばもてはなれて大かたにつかうまつり御覽せられんはをかしうもありなかしとぞ思ひより給ひける」というのであった。玉鬘は既に異腹の妹、四の君腹の弘徽殿女御、養父六条院の養女秋好中宮らが今上に侍していることを考えあわせ、万一、出仕して帝寵を蒙ることもなれば大変だと、実は出仕を決っていたのである。今迄、深窓で抽象的に考えあぐんで迷路に立っていたが、晴々とした風景の中に繰り出して、美々しい行列をみる心樂しき、絵巻のような賑わい、はじめてみる公卿達、殿上人ら、かねて文を贈ってくる貴公子の誰れかれ、一きは端麗な鳳輦中の帝、わっと湧く群衆の讚嘆の声、玉鬘の胸も高鳴ってくる。養父の六条院がしきりにおすすめだし、帝の寵愛めあてなぞでなく、純粹の官人としてこの帝にお仕えするのならばねえ、と思慮をめぐらして決意するといふのである。父内大臣ゆづりの、「かたはなるさまのことを思ししのばず」といふ潔癖な性格と思慮深さをみせている

のである。さて内大臣の風采は、

(一) 容姿・風采 ①

この時、はじめて実父内大臣をみる玉鬘は

「げにきら／＼しう物きよげにさかりにものし給へどかぎりあり(a)
かし人にすぐれたるただ人(b)」

と思う。天皇には及ばぬが、臣下の中では素晴らしい父君、と思う。(a)きら／＼しう、(b)物きよげというのは、既に拙著「源氏物語論」で詳述したように、左大臣家(故致仕太政大臣家)は美男美女の家系である。後に、「右の大殿致仕(内大臣)の族をはなれてきら／＼しう清げなる人はなき世なり」竹河(夕霧は内大臣の甥にあたる)というように。目もさめるような華麗さ、すつきりと垢ぬけた男ざかりの貴公子と玉鬘の目に映った。ここで、(c)玉鬘の、慕いこがれていた未だ見ぬ父を目前にしなから、この冷静な観察眼を見落してはならぬ。

(二) 性格・人柄 その(2) 容姿・風采 ②

内大臣の妹葵上の一子夕霧は、病中の大宮に殊にやさしい。「中将の君も夜屋三条の宮に添ひ侍ひ給ひて心の空なく物し給」。大宮が、「この中将のいとあはれとあやしきまで思あつかひ心をさわがいたまふ見侍るになんさま／＼にかけとめられていま／＼でながびき侍る」と源氏に物語る条がある。夕霧は父源氏ゆづりの情愛の深さ、母葵上、故致仕太政大臣、大宮系のまごころ、註(6)実意の人物として造型されている。彼も亦、半分は内大臣系の人なのである。さ

て、故致仕太政大臣の長子内大臣は、青年時代は純粹、実意の人であつた。父左大臣ゆづりの気骨ある正義漢であつた。流謫の光源氏を須磨に訪れたのは彼一人であつた。しかし、あの時から十年、政敵も影をひそめた今、源氏・内大臣の天下となつて以来、ライヴァルとなつてしまい、いつか人柄が偏つてきたのである。源氏に対して、何のふくみもたず明朗豁達な貴公子ぶりは、もうない。頭腦明晰さが裏目に出て、變に深読みをしたり、勘ぐつたりするようになる。他方身内に対しては、権力志向の助けとなる弘徽殿女御、長男柏木を熱愛するが、玉鬘、近江君のような外腹の娘には甚だ情がうすい。老母大宮に対する内大臣の態度、これまた、当時、否、いつの時代にも、何処にでもいる息子像、父親像を生々しく描き出す。源氏物語は、まさにノヴェルである、所以である。

まず、老母大宮に対する態度を、夕霧の外祖母大宮に対する真情溢るる態度と、対照的に形成してゆく。地の文で説明するのではなく、大宮の口から語らせる筆の妙に注目しよう。

(2)は内大臣が老母大宮に対して、甚だ芳しからぬ人間として造型される。大宮はかこつ。「おほやけごとのしげきにやわたくしの心ざしのふかくらぬにやさしものとぶらひものし侍らず」公務多端の故か、母を思う気持が薄いのか、それも訪ねてくれません、つまり、母に冷淡な子だといふのである。大宮の死後、夕霧は思う。内大臣は葬式とか法事とかは人目を驚かす程、盛大にやる方だが、しんじつ母を思う情には乏しい。だのに父源氏は大宮に対して心からいたわつていらつしやつた、と。大宮を見舞つた源氏は大宮に玉鬘の事を打ちあけて内大臣を招かせる。内大臣は源氏が母を見舞つている

旨をきいて驚き、どういふ態度をとるか。「いかにさびしげにていつくしき御さまをまちうけ聞え給ふらむ御前どももてはやしおましひきつくらふ人もはかどしうあらじかし」と、子息達を三条の宮にたてまつるが、自身は出むかない。母の立場を考へて故太政大臣未亡人としての威儀をつくらうてやるだけである。母の心中を察したりはしない。そこへ届く大宮の文をみて漸く腰をあげる。勿体ぶつた内大臣の態度を形成する。御文の中に「きこえまほしげなる事もあなり」とあるのを、てつきり夕霧と雲井雁を結婚させてほしいといふのであらうと早合点する。

「おぼしまはずに宮もかう御世のこりなげにてこのこととせちにのたまひ、おとごもにくからぬさまにひとことうちいでうらみたまはむにとかく申かへさふことえあらじかし、つれなくて思ひいられぬをみるにはやすからずさるべきついであらば人の御ことになびきがほにてゆるしてん」

と内大臣は考へめぐらす。母も御余命いくばくもなささうで、こんなに二人を一緒にさせておくれと御希望だし、六条院が穩やかに一言なせ嫁に下さらぬ、と口に出して仰有られたら、反対も出来まいよ、夕霧が平然としてるのをみると、此方が心中不安でならぬ、いいチャンスがあれば、大臣の頼みに負けた、というていで許してやるう、と、いふ氣になつてゐる。ところが又、彼は、母大宮と源氏が「御心をさしあはせてのたまはむ事と思ひよしたまふに、いとゞいなび所なからむが、又「などかさしもあらむ」とやすらはるゝもいとけしからぬ御あやにく心なりかし」、素直に許す氣になれなくなる、本当に困つた御偏屈な心よ、と評される。せつかでち早合点

負けん氣、片意地な人物とする。しかし、大官が御文をわざ／＼下さり、源氏の君も対面しようとおまちなのに、失礼だ、とにかく参つてその場の様子でどうともしよう、という氣になつて出かけるのは、礼を失してはならぬという、礼節を重んじる故致仕大臣の血統である。その際、「御さうぞく心ことにひきつくりひて御前などことも／＼しきさまにはあらでわたりたまふ。きみだちいとあまたひきつれて参りたまふ。もの／＼しうたのもしげなり。たけだちぞ／＼ろかにものしたまふに、太さもあひていしうとくにおも／＼ちあゆまひ大臣といはむにたらひたまへり。ゑびぞめの御さしぬき桜の下がさねいとながう尻ひきてゆる／＼と殊更びたる御もてなし、あなきら／＼しとみえたまへる」という様子である。入念な(a)目立つ得意げな(f)服装、立派な体格(d)、堂々と貫禄ある態度(g)、多勢の子息を従え(b)、大臣らしい風貌(c)(e)である。ことにgには内大臣の故意に大臣らしく振舞う姿をうつし出す。あゝ立派なもんだ(h)とおみえなさるといふのである。

(三)(3)

久しぶりの対面に競争心は消え、酒盃がめぐり、心のへだてはなくなる。お互に謙虚な氣持にもどる。内大臣の片意地も競争心も、たちのわるいものではない。極めて単純なものである。

玉鬘の事を源氏があかすと「いとあはれにめづらかなる事にも待かなとまづうちなきたま」うのである。しみ／＼昔語りをはじめ、

源氏物語行幸の巻論 — 内大臣家の人々造型 —

二人は、「なきみわらひみみなうちみだれたまひぬ」、もとの親友にもどる。

ここで、内大臣が内心期待していた雲井雁求婚の件を、源氏はおくびにも出さぬ。源氏の底意地のわるさである。作者は源氏を、「をさ／＼心よはくおはしまさぬ六条殿も酔立きにやうちしをれ給ふ」と形成しているのである。源氏に比べると内大臣の片意地、偏屈なんでもは脆いものである。「かのおとどはた人の御けしきなきにさしすぐしがたくてさすがにむすぼれたる心地し給ひけり」内大臣は源氏が言い出さぬのに女方から口にする事も出来ず、胸がはれぬ思いで帰宅する、源氏に仇をとられているのである。——

(夕霧と雲井雁をひきさいた内大臣へのみせしめ) ——を源氏はやつている。今後とも内大臣は手も足も出ない、いら／＼するばかり。

(四)(4)

内大臣は突然の事で「うちつけにいといぶかしう、心もとなう思え給へど、ふとしかうけとりおやがらんもびなからむ。尋ねえ給へらんはじめをおもふに、さだめて心きよう見はなち給はじ。やむことなきかたかたを憚りて、うけはりてそのきはにはもてなはず、さすがにわづらはしう、もの／＼きこえを思ひて、かくあかしたまふなめり」*

と聡明な内大臣は源氏の下心を見とおしてしまふ。
*とおぼすはくちをしけれど、それをきすとすべきことかは、殊更

にも、かの御あたりにふればはせむに、などかおぼえのおとらむ、
宮仕へぎまに、おもむきたまへらば、女御などの思さむ事も、あ
ぢきなしと、思せど、ともかくも、思ひ寄り宣はむ掟を違ふべき
事かはと方に思しけり

源氏の下心を思うと残念——（潔癖な、不様さを極度に嫌う内大
臣としては、まさに口惜しい。源氏が執着する程の娘ならさぞ美人
の我子であろうに、みすく）——、だが、ま、源氏程の方の愛人
となるなら、傷ともいえまい。又、万一玉鬘が尚侍として出仕なさ
ったら、弘徽殿の女御は何と思召すか、困るなあ、と心配する。内
大臣の夢と希望は一に弘徽殿女御にかかっており、女御が大切なの
である。引きとって育てて下さった源氏が、玉鬘の行末について色
々と御考えになつて仰有ろう事に違反が出来ようか、従う外ないの
だ、と諦めつつも、実父らしく、あゝでもない、こうでもあるまい
と思ひ悩む。しかし、「口出しは出来ないのだ」、と簡単に引っこ
んでしまう。それ以上に夕顔の遺児の為に、あえて源氏に積極的に
働きかけたり、骨を折るようなことはしない。宮中に出入られては困
る。それなら六条院のおかこい者か。その外に道を求めてやろうと
はしない実父内大臣である。

裳着の当夜、娘の顔をもつとはつきり見たい、父娘の名のりをし
たい、という内大臣の率直な希望は制止された。外聞を憚るべきだ
と六条院はいう。腰をゆいながら内大臣は泣く。ただの腰結いの役
で通さざるをえない。酒盃が重なる、軽率に愚痴が出る。

世にためしなきことゝきこえさせながら今までかくしのびこめさ
せ給ひける恨みもいかゞそへ侍らざらむ

と、つい源氏に恨み言をいう。そして娘にも、つい、うっかり
うらめしや沖つ玉藻をかくまで磯がくれけるあまの心よ
と恨みがましく詠みかけて泣く。実父に腰を結って貰う感激と、あ
まりにも立派な二人の父大臣に、気おくれして、流石の才媛玉鬘も
返事が出来ない。すかさず、源氏は

よるべなみかゝる渚にうちよせて海士も尋ねぬ藻屑とぞみし
いとわりなき御うちつけごとになむ
と心痛くやつつける。内大臣は、「いとことほりになむ」と、素直
に自己の非を認め、何ともいえぬ。頑固で片意地者だが、軽率、お
ちよこちよい、根は素直な人間である。しかし、胸が狭く、浅
い。彼の胸中は、弘徽殿、長男、次男で精一杯なのである。外腹の
子に親身の情をそそぐ余地がない。昔の愛人の遺児というだけで秋
好中宮、玉鬘を養女にし、世話を見通す——（片や中宮にのしあげ、
片や遺産相続の配慮までしておく）——源氏の、到底、敵ではない
のである。その心豊かさ、その執着の深さ、底意地のわるさにおい
て。

四 偏愛

内大臣は、ほのかにみた娘玉鬘を、はつきり見たい、「なまかた
ほなることみえ給はゞかうまでことゝしうもてなしおぼさじ」と
思つて恋しがる。なまかたは、であれば、そういう気にはならない
であろう。

長男、次男、女御には異腹の姉玉鬘のこと、その間の事情を知ら
せる。しかし、近江君が、玉鬘の事を洩れきいて、不平を言うと聞

いた内大臣は、父親らしく、しんみりと事情を話して聞かせたりはしない。内大臣家で肩身狭くすこす、最近引きとられた近江君にあっては、同じく外腹の姉であるのにもかかわらず。女御の許に伺候したついでに近江君をよんで、「いとはなやかにうちわらひ給ひて」——派手にアッハッハと笑ったのである。

いとかへたるみけはひおほやけ人にてげにいかにあひたらむ
b
内侍のかみのことはなとかおのれにとくはものせざりしといとま
めやかにてのたまへばいとうれしと思ひて……

a bは全く心にもない嘘で、それをc、大真面目な顔をしているのである。愚弄されているともしらず近江君は、本気にして喜んで訴える。それを父は更に嘲弄する。父は吹き出しそうなのをこらえて

いとあやしうおぼつかなき御くせなりや、さもおぼしの給はまし
d
かば、まつ人のさきに奏してまし、おほきおととの御むすめやん
ごとなくともここにせちに申さむことはきこしめさぬやうあらざ

らまし
e
いまにても申文をとりつくりてびしうかき出されよ、
ながうたなどの心はへあらむを御覽せむにはすてさせ給はじ。う

へはそのうちにさげすずおはしませばといとようすかし給ふ
「d残念だった、私に言ってくれてればよかったのに、e今からでも遅くはない。申文を美々しう書き出しなさい、それに長歌を添えたら猶よろし、帝は諸事に関心があられるその中でも、文雅の道を殊に粗畧に遊ばさぬからね」などとおどし半分からかう。漢文の申文は書けまい。長歌も出来まいが、と、たかをくくっての言である。地の文で、「いとようすかし給ふ、人の親げなくかたはなりや」と

評する。父たる者の言うべき言ではあるまい、というのである。

「ものむつきし折は近江君みるこそよろづまざるれ」とてたゞ
わらひぐさにつくり給へど、世人は恥ぢがてらはしたなめたまふ
など、さま／＼いひけり

内大臣が実の娘を笑い種にする非情さ、軽薄さ、それを世間では非難している、という。つまり、家庭人、父親としての内大臣は甚だ失点が多い。学識才腕、容儀体佩人にすぐれた美丈夫、派手で傲岸、偏屈なくせに、根はない単細胞の内大臣が、嫡出の頭中将、弁少将、弘徽殿女御のみに首ったけであったが、母大宮の手許で育った外腹の雲井雁が、思いかけず美しい姫君となると、急に利用価値を認めて夕霧との仲を裂いて迄引きとってしまう。どうも彼の父性愛なるものには、打算、身勝手の色が濃厚である。女御第一主義がその一。長男、次男大切は、家門を継ぐべき、老後を托すべき後継者の故に。雲井雁もいい駒になりそう、というのであるから。

年老いた母宮を三条宮に放っておく。雲井雁の養育をまかせつ放しにし、夕霧との一件では大宮に悪態をついて老母の心情を察しようともせず引きとってゆく。病中の老母もめったに見舞おうともせぬ。外面を派手にするわりには親への真実が乏しく、妻と営む家族だけを後生大事に守ってゆく。まあ、今日どこにでもみられる核家族の、ガリ／＼高級官僚というところ。

長男頭中将（柏木）は権門であく、の強い父内大臣、母（三条太政大臣四の君）北方に毒気を抜かれたか、その庇護の下で成長したからか、苦勞しらずの人の良さから、長男という身を意識して、生真面目に、父の御落胤を探し出して近江君を迎えたのであった。宇津

保物語の仲忠のように、それは理想的な長男の果す役割であったから。しかし、近江君は貴族社会になじまぬ。玉鬘の件を洩れきいた近江君はねたんで、場所柄も弁えず、突拍子もなく

かのさがな者の君聞きて、女御の御前に中将少将侍ひ給ふに出て来て、「殿は御女設け給へるなり。あなめでたや。いかなる人、二方にもてなざるらむ。聞けば彼も劣り腹なり」

と言ひだす。姉の女御は「傍痛しと思して物のたまはず」であつた。無視である。しかし兄の中将は、

「しかかしづかるべき故こそ物し給ふらめ。さても誰が言ひし事を聞きてかくゆくりなく打出で給ふぞ。物言ひたゞならぬ女房などもこそ耳留むれ」

とたしなめる。つまり、長男として、不出来な妹に、「(6)玉鬘の君は二人の大臣に大事にされるだけの理由があるのでしよう。——(7)陀度しかるべき立派な姫君でしよう。——(8)それにしても誰の話をきいて、こんなに突拍子もなく、(9)口さがない腰元ども聞こうのに仰有るのか、いけませんね、」とたしなめる、妹の教育をする。しかし気の強い妹は聞かぬ

「あなかま。皆聞きて侍り。尚侍になるべかなり。官仕にと急ぎ出で立ち侍りし事は、さやうの御顧みもやとてこそ、なべての女房たちだに仕うまつらぬ事までおりたち仕う奉れ、御前の辛くおはしますなり」

とズバリ、遠慮会釈なく恨む。中将も手を焼く。つい軽薄にも、

(父内大臣のように)兄弟は

皆はくゑみて「尚侍あかば某こそ望まむと思ふを。非道にも思しかけけるかな」など宣ふ

と、うっかり嘲弄し、ひやかす。男性が尚侍になれる筈はなく、全く馬鹿にしたいい方である。近江はこれに對して負けてはいない。

「めでたき御中に数ならぬ人は交るまじかりける。中将の君ぞ辛くはおはする。賢しらに迎へ給ひて、軽め嘲り給ふ。少々の人はえ立てるまじき殿の内かな。あなかしこ」と後へぎまにぬざりしぞきて見おせ給ふ。憎げもなければいと腹あしげにまじり引きあげたり

近江にこう出られると、

中将は、斯く言ふに付けても、げにし誤ちたる事と思へばまめやかにて物し給ふ。少将は「かかる方にては頼なき御有様をばおろかにはよもおぼさじ。御心鎮め給うてこそ。堅き巖をも沫雪になし給うつべき御気色なれば、いとよう思ひ叶ひ給ふ時もありなむ」とほくゑみて言ひ居給へり。中将も「天の岩戸さしこもり給ひなむや、目易く」とて立ちぬれば、ほろ／＼と泣きて「この君達さへみなすげなくし給ふに唯御前の御心の哀れにおはしませば侍ふなり」とて、いとやかやすくいそしく下臈童べなどの仕うまつり堪へぬ雑役をも立ち走り易く惑ひ歩きつゝ志を尽くして官仕しありきて、「尚侍に己を申しし給へ」と責め聞ゆれば浅ましう、「いかに思ひて言ふ事ならむ」と思すに物も言はれず

中将(後の柏木衛門督)は、①近江君が言ふとおどりだ、なる程しまた。私が迎えてこねばよかつたのだ、と反省し、しゅんとして、生真面目な態度となる。純情、素直な性格である。これに対し次男の少将(後の紅梅大臣)は、②③と猶も非情にも嘲弄しつづけ、④と、小馬鹿にしている。軽薄、冷淡な態度である。中将は、⑤、「あのね、ひっこんでらっしゃるのが無難でいいんですよ」と、又親身に忠告して、いたたまれずにそそくさと座を立つ。いかにも実意のある長兄らしい心遣、恥らいがあり、権門のやさしい貴公子の姿が現出される。当代随一の名門、故致仕太政大臣嫡孫、内大臣長男で、人々にちやほやされ、苦労しらずに育つたせいで、貴族特有の軽薄さ、軽率さをもつ反面、この家門特有の生真面さ、純情さをもつ中将は、その故に、六条院の北方女三宮を諦めきれずにおおけなくも犯した軽率な所行、気付いた源氏に試楽の夜、「すぐる齡にそへて酔泣こそとめがたき業なりけれ。衛門督の心とどめてはゝゑまるゝいと心恥しや。さりとて今暫しならむ、逆様にゆかぬ年月よ。老はえのがれぬわざなりとて打見やり給ふ」眼光に射すくめられ、もりつぶされて発病、死に赴く、後日の彼の運命は、この性格の発展線上にあるのである。父帝の後妃であり、継母に当る藤壺を犯し、不倫の我が子を父帝に抱かせ、まふまふと帝位につけて世を欺き通した光源氏のずぶとき、底意地のわるさは、柏木には微塵もない。「心弱くはおはしまさぬ」源氏や父内大臣とはことなり、柏木は純粹、純情、素直であつた。行幸の巻の柏木は悲劇の主人公となるべく形成されつたのである。

女御は内大臣と四の君——夕顔を追放したたかな北方——

源氏物語行幸の巻論 — 内大臣家の人々造型 —

との間の娘。氣位高く、異腹の妹の尚侍のぞみに、呆れかえつて物もいぬ。「女御も面あかみてわりなうみぐるしと思」すだけで、女房としてあづかつている不作法な妹を、可愛がりはするものの、①、古参のしかるべき女房につけて教育させるとか、しみく言つてきかせる、とかはしない。この人も人の痛みのわからぬ、情のこわい貴婦人とする。

近江君には作者は存分に腕を振う。近江君は言い度い事を言い放つ。②③と、まさに痛快でもある。怒っている近江君を「にくげもなけれど……」と好感をもたせる。一生懸命、姉女御に奉公し④、早速、「尚侍に〜」とせきたてる。純情、直情径行、せつから、軽率、これこそは父内大臣の遺伝である。まだそれはある。父大臣は娘がひるむかと期待して、申文、長歌云々とおどし半分に言つたのであるが、彼女はびくともしない。「長歌の方は下手ながら何とか詠みましょう。漢文の申文の方は父上よろしく御願します」。と甚だテキパキと父の難題を解決してしまう。この向う意気の強さ、負けん気、これこそは又父ゆづり。父に嘲弄されるともしらず、呼ばれて「を」と大声で答えて出てくる。「……さも御気色賜はらまほしう侍りしかど、この女御殿など、をのづから伝へ聞えさせ給ひてむなど頼みふくれてなむさぶらひつるを。なるべき人物し給ふやうにきく給ふれば、夢に富したる心地し侍りて……」軽薄な父のからかいを真にうけて率直に腹臆なく言つてのける。それを貴族共は吹き出しそうになるのをこらえて……と、形成するのである。作者の冷徹な目がある。田舎出の近江君を此処で小馬鹿にしている人々、内大臣がこの後、雲井雁の一件で、どんなに夕霧、源氏にいたぶられ

るか、長兄中将（柏木）が軽はずみな過ちから死へと導かれる、次兄少将が、姉の女御が、ましてくすく笑う女房共の運命がどうなるか、神ならぬ身の何人も予測は出来まい、と作者は暗にいつているのである。

内大臣、長女玉鬘、次女女御、長男中将、次男少将、近江君、そして、ちらりと朔夕霧らが鮮明に、或る場合は対比を用いて形成されるこの巻は、玉鬘のゆかりで、格別入念に人物造型がなされているのである。

註(1) (2)拙著「源氏物語論」459頁～490頁参照のこと。「源氏物語の探究」第八輯中拙論参照のこと。

註(3) 胡蝶巻 紫上が「「いでや我にても又……」と微笑みて聞え給へば、あな心疾と思いて……心の中に、人の斯う推し量り給ふにも、如何はあるべからむと思し乱れ……」

註(4) 拙著「源氏物語論」 左大臣系性格419頁～425頁参照のこと。